

# 「しずおか自然史」 静岡新聞日曜版に掲載はじまる！

池谷 仙之

静岡新聞の日曜版（2ページのトップ）に9月2日から毎日曜日、約1年間にわたり、「しずおか自然史」という紙上博物館を展開することになりました。

日本列島のほぼ中央に位置する静岡県は3つのプレート境界をもち、列島を東西と南北に分断する大断層が走り、駿河湾の最深部から富士山の頂上までの標高差は約7千メートルもあります。この特異な地質と地形は豊かな自然を生み出し、多様な動植物が生息しています。これらの豊かな自然は日本を代表する全ての要素を兼ね備え、まさに自然史博物館そのものです。

このような県下の自然をつぎのようなテーマの下に、きれいなカラー写真とともに、順次、紹介していきますので、どうぞご愛読ください。

- 1) 静岡県の生い立ち、
- 2) 地層が語る静岡県、
- 3) 静岡県下の特異な生物、
- 4) 環境の変化と共に変わりゆく生物、
- 5) 守れるか！絶滅寸前の動植物。

この企画は、2年前に当ネットワークの有志と当時県広報局長だった谷 和実氏との懇談の折に、谷氏から「新聞紙上で連載してみたら」との提案があり、静岡新聞編集局および同文化生活部と打ち合わせを重ねて計画しました。

平成19年(2007年)9月2日 (日曜日)

## しずおか自然史

### 「生命と環境」守ろう

#### はじめに

地球の年齢は四十六億歳になる。この歳まで地球は何をして来たのか。それこそ、多くの出来事を経験して来たに違いない。生物は「この地球の歴史のニコマド」して、およそ三十八億年前に誕生した。この生命の誕生によって地球環境は変化し、その環境がまた生物の進化を促進してきた。

このように、生物と地球の環境は互いに絶えず密接に影響し合っている。現在、私たちが認識している生物は二百万種ほどであるが、すでに絶滅してしまった化石種や、直接見るのでない地下深部や深海底などに生息する、まだ名前もない生物たちを含めると、この地球上にはおぼたらしい数の生命体が生まれたことになる。これらの生命の営みと生命を育んできた地球の営みが自然史なのである。私たちはこの地球の「自然史」を理解し、「生命とそれを取り巻く環境」を大切に守っていかなければならない。自然史を理解することは、

身の回りの豊かで神秘的な自然の「心」を五感で感じ取る（と）から始まり、「この自然の」ありよう」をもっと深く知りたいたいと思う知的活動に他ならない。

しかし、単に「花鳥風月を五感で感じ取るだけ」には、自然の「理」を理解することは出来ない。「自然の神秘」そのものを深く理解するためには、まず自然観察法や標本の採集・整理・保管法などの基本を学んだ上で、更に深く学術的な探求が必要となる。

これらの過程をサポートするのが自然史博物館である。静岡県には百を越す自然史系の学会や研究会、同好会が活動している。グループに直接参加して、日々何らかの形で「自然」を愛し、日々何らかの形で「自然」と深く関わり合っている。NPO静岡県自然史博物館ネットワークはこのような自然を愛する人々を支援し、その活動の拠点となるような博物館をつくることを目的としている。

静岡県は三つのプレート境界をもち、日本列島を東西と南北に分断する大断層が走り、駿河湾の最深部から富士山の頂上まで約七千メートルの標高差を持つ。この特異な地質と地形は豊かな自然を生み出し、動植物の生息分布を規制している。まさに日本を代表する全ての自然の要素を兼ね備えた自然史博物館そのものである。池谷仙之・NPO静岡県自然史博物館ネットワーク代表



朝霧高原で野鳥を撮ったNPO静岡県自然史博物館ネットワークの自然観察会（2007年6月）

静岡新聞日曜版に平成19年9月2日から連載がはじまった「しずおか自然史」

執筆陣は当ネットワーク会員の他、テーマによっては外部の専門家に依頼いたします。私たちの活動や静岡県の自然の姿を多くの人に伝えられればと思います。連載終了後には、追加・加筆して一冊の本として出版したいと考えております。

# 2007年三二博物館報告

横山 謙二



辻公民館での展示会



クレッセ静岡で行った『静岡の自然展』

今年の夏休みは、辻公民館のホールで7月に『身近な自然展』、8月4日（土）にクレッセ静岡で『静岡の自然展』、8月7日（火）～12日（日）にかけて『静岡科学館るく・る』の場所をお借りして、三二博物館『絶滅のおそれのある動植物』を開催しました。

まず、『身近な自然展』について報告します。『身近な自然展』は、辻公民館からの展示物借用の要請で行い、展示期間は一ヶ月間行いました。展示物は、静岡市内でごく普通に見られる動植物の写真・説明文のパネル27枚のほか、清水区辻周辺で採取した植物8標本、身近に見られる蝶と甲虫標本の展示と淡水魚の生態展示を行いました。また、NPO自然博ネットの紹介やパンフレット 会報『自然史しずおか』を設置しておきました。

展示後の見学者の対応や標本・展示物の管理は辻公民館の職員の方にやっていただきました。その為、どのくらい見学者が来たのかは、よくわかりません。ただ、公民館利用者が展示物を見学しているところは何度か見られ、また設置しておいたパンフレットも減っていたので、公民館利用者の辻地区の住人の方々には、私たちの活動を理解していただき、NPO自然博ネットの存在を知っていただけたのではないかと思います。

次に、クレッセ静岡で行った『静岡の自然展』



について報告します。クレッセは清水区鳥坂のジャンボエンチョーやスーパー田子重などの店が集まる複合型商業施設です。今回は、このクレッセ静岡のイベントとして展示を行いました。展示物は、『身近な自然展』と同じ展示物に加え、サメの歯やアンモナイトの化石の展示、モグラ・コウモリなどの剥製標本などを展示しました。また、化石のレプリカ作製体験コーナーを行いました。レプリカ作製コーナーは人気があり、見学者のほとんどの子供がやってきました。また、ふだん見慣れないモグラ・コウモリの標本も人気がありました。見学者は、買い物やゲームセンターに遊びに来たついでによった人たちばかりでしたが、それでも300



静岡る・く・るで開催したミニ博物館  
『絶滅のおそれのある動植物』



化石のクリーニングは大盛況

人近くの方が見学しに来てくれました。

最後に、ミニ博物館『絶滅のおそれのある動植物』について報告します。場所は、る・く・る10階のガレージで行いました。展示物は、2005年のミニ博で展示した絶滅危惧種の解説文と写真のパネル54枚のほか、絶滅危惧植物標本を23標本、チョウなどの昆虫標本、両生類・淡水魚・カタツムリなどの生態展示、掛川の化石などの化石標本を展示しました。また、化石発掘体験コーナーを設置しました。見学者は小中学生が中心で、一日あたり740人、6日間合計で4,450人程の人が見学に来てくれました。

人気展示物は、生態展示や化石標本、昆虫標本などでした。特に、子供たちは、両生類の生態展示に興味を持ち、かわいい・飼ってみたいなどの感想が聞かれました。また、アズマヒキガエルが餌を食べる様子は、大人の人たちでも興味深げに見学していました。昆虫標本の展示では、絶滅危惧のチョウよりも外国産の甲虫が人気で、昆虫でないサソリが一番人気がありました。また、毎年行っています化石発掘体験コーナーは、ものすごい人気で、用意していた化石ブロックは、わずか2日間でなくなっていました。

動く・さわれる展示物は人気がありますが、パネル展示は人気がありませんでした。解説文などは、訪れた大人の方でも、読んでいる方はほとんどいませんでした。科学館利用者の子供たちは、写真を見て解説文を読むよりも動画で音声解説の方が慣れているようです。それでも見学しにきてくれた子供たちは、物理系の展示物の多い科学館の中で、自然に関わる標本を見て、

触れることにより、わずかかもしれませんが自然史について学び、自然について興味をもってもらえたのではないかと思います。また、つきそいで来られていた保護者の方々には、自然博ネットの活動や県立博物館の必要性について理解していただけましたと思います。

自然博ネット主催のミニ博物館は、2004年からはじめて今年で4回目です。今年のミニ博では、開催のお知らせを会報に掲載しただけで、主な広報は各開催場所施設の方にしていただきました。にもかかわらず、今回のミニ博では、来館者の合計が5,000人近くにもなりました。過去3回のミニ博物館の来館者合計でも1,000人に達しません。今までのミニ博では人を集めるための広報活動にさんざん苦労し、それでも人が集まらなかったことを考えると複雑な思いがします。しかし、多くの方々に展示を見ていただき、NPO自然博ネットの存在を知っていただけただけことはうれしく思います。

以上、今年夏のミニ博物館報告でしたが、このほかに富士山こどもの国から標本貸し出しの依頼があり、7月21日～9月2日まで昆虫標本を貸し出しています。また、実現はしませんでした。が辻公民館以外の公民館からも展示の依頼がありました。こうした依頼があるということは、県から委託された静岡県自然学習資料保存事業室の存在が知られ始めた結果だと思えます。これからは県立自然史博物館まで、こうした依頼を積極的に受け、博物館の役割の一部でも補っていけるよう努力していきたいと思えます。

# 自然史博物館とその役割

柴 正博

2001年度から2年間にわたり静岡県は自然学習・研究機能調査検討会を設け、自然学習研究と拠点施設のあり方とその県民ニーズ、自然系博物館の整備や運営について具体的に検討し、2002年10月に報告書が公表された。しかし、現在に至るも県ではこの報告書に示された自然系博物館の設置について何の動きもない。また、全国的には、博物館に指定管理者制度が導入され始め、日本学術会議は博物館の役割と機能が維持されないことを強く憂慮して、今年5月に「博物館の危機をのりこえるために」という緊急声明を公表した。これら私たちをとりまく現状に対して、私たちの目指す県立自然史博物館とその役割についての私の考えを、ここでもう一度明確に示しておきたい。

## はじめに

日本における博物館は「展示館」ないし「普及教育施設」として始まったために、博物館は一般に利用する側に主体のある教育「施設」ないし公共のレジャー（余暇活用）「施設」と思われがちである。そのため、多くの博物館では展示や教育行事が優先され、研究や資料収集および保存が省みられない場合も多い。また、博物館活動の主体を担うべき学芸員が十分に配置されていない場合も少なくない。さらに、学芸員がいてもその研究における専門性はほとんど認められず、展示物の制作とそのメンテナンスおよび教育活動が主な業務とされ、行政職として他の部署に異動させられる場合もある。

最近では、博物館は行政からも「無駄な箱モノ」の象徴とされ、地方自治体の財政難や市町村合併などにより経費と人員の削減、利用者数や収益率をもとにした博物館評価制度の導入、さらに指定管理者制度の導入などによって、博物館はその機能回復以前に存続の危機に直面している事態も多い。

博物館の本来の機能には、教育施設やレジャー施設という側面だけでなく、それが地域の自然や文化を対象としたものならば、地域の自然環境や文化財の資料と情報を総合的に収集し保存する機能が基本にあり、その資料や情報を研究して公開する「研究センター」という重要な役割をもつ。

## 自然史博物館とは何か

博物館法には、「博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ）し、展示して教

育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（社会教育法による公民館及び図書館法（昭和25年法律第118号）による図書館を除く。）のうち、地方公共団体、民法（明治29年法律第89号）第34条の法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人が設置するもので第2章の規定による登録を受けたものをいう。」と、博物館を定義している。

すなわち、博物館法では博物館を「資料を収集保管し、展示し、必要な普及教育・研究事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」として扱っている。またICOM（国際博物館会議）の定義やUNESCO勧告でも、博物館は収蔵・研究・展示を系統だてて継続し、後世に伝える業務を遂行することが謳われている。

博物館は教育機関の役割もあるが、博物館は教科書や図鑑にのっている既知の知識を単に教える場ではなく、来館者が実際の「もの」に接して体験しながら感動とともに興味をもち、それらについて調べながら学べる場を提供する機関である。そのためには、博物館側がその「もの」について常に研究し、博物館のメッセージとともにその成果を示す必要がある。また、博物館は「もの」の周りに人が集まるコミュニティでもある。「もの」についての調査研究や収集・保存、教育普及についても博物館の学芸員だけでなく、そこに集まった人とともに活動を展開できる場である。

大阪市立自然史博物館の館長だった千地万

造氏は「自然史」を、「自然科学の一分野で、自然界の構成員である鉱物・岩石、植物・動物などの性状、類縁関係、成因、相互のかかわり合い、進化発展の過程など自然の体系とその歴史を明らかにするとともに、人間の生活や文化の自然環境から受ける影響を明らかにして、未来の人類社会のあり方に対してその分野で貢献しようとするものである。」と定義している。

このことから、自然史博物館は自然の姿を明らかにしてその成因や自然の体系を歴史的に理解し、現在と未来の人類社会のあり方に対して貢献するための研究教育機関と定義することができる。人をとりまく現在の自然環境は、地球誕生の約 46 億年前から形成されているとはいえ、そのほとんどは今から約 200 万年前からの第四紀以降、いわゆる氷河時代の中で私たち人類の進化や社会形成も含めて形成されてきた。その意味で自然史博物館のテーマは、特に現在も含めた第四紀の自然環境の変遷、すなわちヒトと自然とのかかわりについて最も大きな力が注がれるべきである。

### 自然史博物館の役割

現在、多くの人々が地球の自然環境に大変関心をもっている。しかしその反面、学校教育の中では自然環境を把握するための基礎となる「地学」や「生物」の教科が軽視され、高校ではほとんどの生徒がその教科を履修できない。また、自然環境教育は、「ゴミを捨てない」などの道徳教育や省エネルギー教育と摩り替えられ、肝心の自然環境の実態や変化を理解し、その仕組みを探求し考察するという自然科学的な研究教育アプローチがほとんど含まれていない。

自然現象や自然の変化はいろいろな原因が絡み合って起こる。そのため、その原因を知るには、その自然の成り立ちとそのメカニズムを明らかにしなければならない。現在は人工改変による自然環境の変化が著しく、地域の自然の状態をきちんと把握してそれぞれの地域での自然の成り立ちを明らかにするためには、地域の自然の状態を常にモニターする必要がある。

最近では、種の多様性を守り野生生物の絶滅を防ぐために、全国的にも地域的にも生物の分布、特に絶滅危惧種のリストが掲載されたレッドデータブックが発行されている。静岡県でも県環境森林部自然保護室が企画し、静岡県自然環境調査委員会による調査によって 2004 年に

レッドデータブックが出版された。この調査を行った委員会のメンバーのほとんどは県内の動植物の研究会や同好会の会員で、その多くは高齢で後継者が少ない。また、調査の際に同定のために採集した標本も保存する場所や組織がなく、野帳データなどの記録さえも保存されていない。このような調査では、証拠となる標本や具体的な資料情報は結果と当然一対の存在であり、追試再確認や将来同様の調査を実施する際に必要な資料である。

静岡県には県立自然史博物館が無い。そのため、そうした活動の中心となる機関や標本などを保存する施設もない。もし、県立自然史博物館があれば、レッドデータブックに関する調査研究は博物館が中心となって実施し、標本や調査資料を系統的に整理・保管することができただろう。また、博物館の学芸員または研究者が中心となって地域の愛好家にとともに、後継者を育てながらチームを組み、市民参加の調査体制を計画的に構築していくことも可能だったかもしれない。地域の自然史博物館の役割を、私はその地域の自然の姿を記録し、その姿や私たちとその自然環境の成り立ちのメカニズムについて、地域の人たちとともに調べて理解して、地域の将来の自然のあり方を検討することであると考えている。

地域の自然環境の上に人々の生活があり、自然環境の姿や仕組みについての理解なくして生活（政策判断）をすることは、自然環境と人の生活との間に多くの歪みや問題をもたらす。また、現在や過去の自然の実態を示すデータや標本は、その時々々の自然環境を示す個別の証拠であり、人類が生きていくための自然環境についての基礎資料、すなわち人類の生存権を保証する証拠として、今後非常に重要な意味をもつことになる。

県レベルの公的な研究機関の多くは、生活や産業に密着した応用的研究が主体で基礎研究はほとんど行われていない。それでは研究しても収益に繋がらない地域の自然環境の基礎研究は、どこでだれが行えるのだろうか。収益と密着する応用研究の一部は民間企業に任せ、私たちと子孫のための自然環境の基礎研究を行政はむしろ行うべき使命があるのではないだろうか。そして自然史博物館は、地域の自然研究教育に関するコミュニティーとして、その使命を果たすべき役割をもつと私は考える。

## 静岡県の植物 (6)

# トキワマンサク

杉野孝雄



トキワマンサクの木



トキワマンサクの花

トキワマンサクを漢字で書くと常盤満作、常盤は木の葉が常に緑で色を変えないことで、その名のように常緑のマンサクです。早春に黄色の花が開くマンサクは、マンサク科のマンサク属 *Hamelis* に所属しています。トキワマンサクの花は似ていますが、常緑であること、花期が4月でマンサクより遅く、淡黄白色の花が枝の先に6~8個集まって着くこと、萼筒の基部に包葉も托葉もないなど多くの違いがあることから、別属とされ *Loropetalum chinense* (R. Brown) Oliver の学名がつけられています。属名のロロペタルムはギリシャ語の loron (革紐) と petalon (花弁) の複合語で、長さ約15mmの線形の花弁の様子に由来しています。この属の植物は日本、中国、ヒマラヤ東部に3種ほど知られています。

珍しい木で静岡県内では1箇所、湖西市神座に80本ほど群生する生育地があり、「トキワマンサクの北限群生地」として、静岡県の天然記念物に指定されています。国と静岡県のレッドデータブックでもあります。日本では静岡県以外には、三重県の伊勢神宮宮域の前山と熊本県の小岱山に知られているだけです。

栽培の容易な植物で挿し木でもよくつきます。自宅の庭では挿し木で殖やし垣根に使っています。根は長く伸び地表に出るとそこから芽を出し成長もします。静岡県、三重県、熊本県、中国とたどっていくとフオツサ・マグナ要素の一つとも考えられますが、三重県の産地は伊勢神宮宮域内。熊本県小岱山の産地は「熊本県植物誌」(1969)では、生育状況から野生化?とされ、自生でない可能性も指摘しています。ところで、静岡県の産地も林内を踏査すると、シデコブシがあるなど植栽または栽培からの逸出の可能性も捨て切れません。DNA分析などでその由来が明らかになるとよいのですが。

最近中国から変種の花が赤色のアカバナトキワマンサク(ベニバナトキワマンサク)が導入され、庭などに広く植えられていてこの方が一般的です。トキワマンサクの発見史などについては、杉野孝雄「トキワマンサク雑記」(1979)遠州の自然4:67-68を参考にしてください。

## 静岡県の哺乳類 (6)

# カヤネズミ

三宅 隆



カヤネズミ (撮影 伴野正志)



カヤネズミの巣の中の子 (伴野正志)



カヤネズミの球巣 (撮影 三宅 隆)

体長約6cm、尾長約7cm、体重は10g前後。子供の手のひらの中にすっぽり収まってしまう程、小さい、小さいネズミ、それがカヤネズミです。このカヤネズミ、とても面白い習性を持っています。鳥のように球形の巣を作るのです。

ススキやアシなどの地上1m位の所に、初夏から夏にかけて、草の葉を裂いて丸い球巣を作り、この中で、子育てをするのです。カヤネズミの生息地は、草原や湿地帯。普段は地上付近で生活するのですが、子育ては、この球巣の中で行うのです。

数十年も前の話ですが、鳥の空巣と間違えたようで、カヤネズミの巣が動物園に持ち込まれたことがありました。中には、生後数日と思われる子が6匹も入っており、飼育していたハツカネズミを仮親にして育てさせることとしました。子育て中のハツカネズミに、カヤネズミの子を混ぜるのですが、そのままだと殺してしまう恐れがあり、ハツカネズミの尿の臭いをこすりつけて自分の子供と間違えさせ、無事育てあげさせました。

静岡県版レッドデータブックの調査では、このカヤネズミも対象として県内での生息地を探し回りました。しかし、確認された地点は、巣の痕跡を含めても、県内でわずか16箇所のみ。湿地帯の開発による減少、多くの河川敷での公園化やグラウンド化などによる草地の減少など、生息可能な場所が減少していたのです。そのため、カヤネズミは存続基盤が脆弱な種として、現在は絶滅の恐れはないが、生息・生育条件によっては絶滅危惧として上位ランクに移行する要素がある、準絶滅危惧種に指定されました。

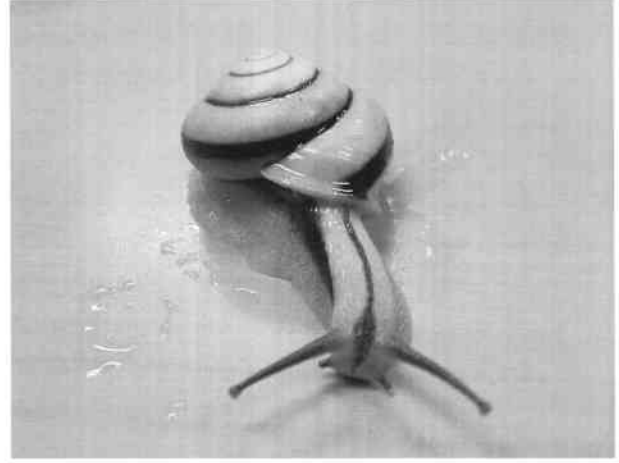
これからも、カヤネズミの調査を続けていくつもりですが、この小さな可愛い隣人が、いつまでも生き残れる場所を確保してあげるのが、ヒトとしての責務ではないでしょうか。

# 静岡市近郊の陸産貝類

大貫 貴清



クノウマイマイ



ハコネマイマイ

雨上がりになるとカタツムリやナメクジなどが壁や木の幹などに出て来るのを皆さんも見た事があると思います。カタツムリやナメクジの仲間は全て陸で生活する貝の仲間です。

陸産貝類は移動力に乏しいので地域ごとに様々な種類に分化しており、静岡県内だけでもおよそ130種程度が記録されています。静岡県での陸産貝類の研究の歴史は古く、下田にペリー提督が来航した際に採集されたシモダマイマイが記載された事から始まり、以降多くの研究者によって調べられてきました。

静岡県は東西に長くまた地形も多様な為、様々な陸産貝類が生息しています。今回は静岡県中部に位置する静岡市近郊の陸産貝類に関して紹介したいと思います。

静岡市は市街地に山地が接している場所が多く少し足を伸ばすだけで様々な種類の陸産貝類を目にすることが出来ます。

まず市街地では、オナジマイマイやウスカワマイマイ、チャコウラナメクジといった全国どこでも見られる種類が多くいますが、神社や樹木の多い公園の周辺ではクノウマイマイという大型のカタツムリを目にすることが出来ます。このカタツムリは静岡市近郊では割と多く目にすることが出来ますが、大井川以東から沼津市付近まで範囲の海岸地域を中心に生息しており、他の地域では見る事が出来ません。

また神社や樹木の多い公園の落ち葉や朽木



オオカトノサマガセルとオクガタギセル

をひっくり返すと、ヒクギセルやヒカリギセルといったキセルガイとよばれる細長い殻をもつ陸貝の仲間を見つけることができます。

少し山に入ってゆくと、川沿いの広葉樹の幹にハコネマイマイという白い地色に黒い帯の美しいカタツムリを見ることが出来ます。また前述のクノウマイマイに良く似ていますがより平たく角が張っているヒラマイマイというカタツムリもいます。

また下草が生えているような場所ではニツポンマイマイやベッコウマイマイの仲間も見ることが出来ます。

さらに森の奥深く、沢沿いの広葉樹が多く見られる森ではオオケマイマイという毛の生えたカタツムリやオオトノサマガセルやオクガ





ミヤマヒダリマキ

タギセルといった前述のキセルガイの仲間でも大型の種類が生息しています。またミヤマヒダリマキマイマイやミノブマイマイといったカタツムリもこのような自然度の高い場所で見ることが出来ますが、この2種は全国的にも非常に珍しいカタツムリです。

またイボイボナメクジという非常に稀な陸貝も静岡市近郊の山地に生息しています。この

陸貝はナメクジという名前が付いていますが、所謂ナメクジの仲間ではなく、また肉食性で他の陸貝を襲って食べるという変わった生態を持っています。全国的に生息しているようですが、発見例が少なく詳しい生態や分類が未だに分かっていません。

このように静岡市は市街地から割と近くでも珍しい陸産貝類が生息する恵まれた場所ですが、その分開発される危険も多く生息状況は楽観視出来るとは言えません。特に近年市街地付近に生息するクノウマイマイやヒラマイマイ等身近な種類が以前に比べ少なくなったような気がします。去年まで沢山いた場所でも次の年にはほとんどいないという事もよく経験します。

みなさんも身近で大きなカタツムリを見かけたらそこはまだカタツムリが生息出来る環境が残されている場所であるということです。少し気を付けて見てみるのも面白いかもしれません。

---

静岡大学キャンパスミュージアム企画展

## 南米コロンビアの蝶と蛾

—大陸の孤立地塊サンタ・マルタ山群の自然—

---

日時：平成 19 年 11 月 17 日（土）～22 日（木）  
10：00 から 16：00 まで 一般公開、入場無料。

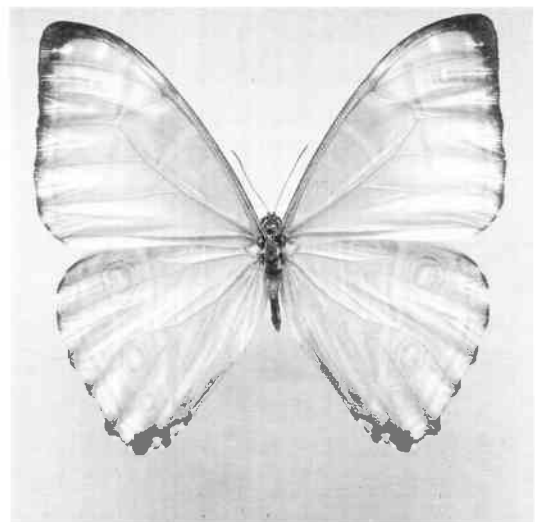
場所：静岡大学静岡キャンパス

キャンパスミュージアム（理学部 B 棟 1 階）

ミュージアムトーク：11 月 17 日（土）、11 月 18 日（日）13:00～14:00 高橋真弓氏（元日本鱗翅学会会長）の解説があります。参加自由。

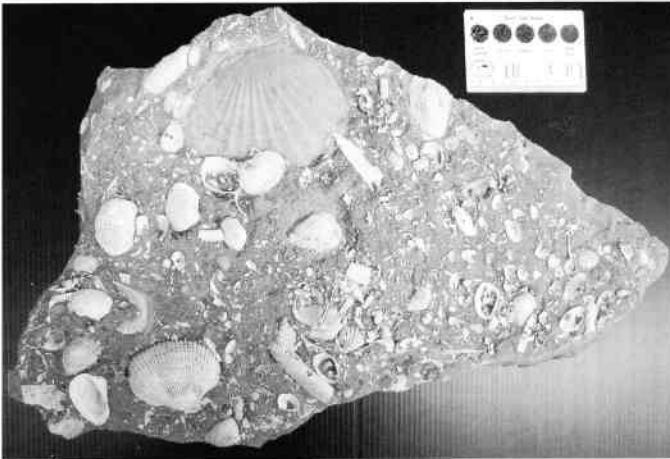
1967 年に静岡大学コロンビア・アンデス学術調査隊が組織され、静岡大学の教官と学生 7 名が参加し、コロンビアの最北部の孤立山塊であるサンタ・マルタ山群の、主として新生代第三紀の地質・地史・古生物と昆虫類（主として蝶類と蛾類）の調査が行われました。その時の学術調査で採集された蝶と蛾約 3,000 点がキャンパスミュージアムに保管されています。

当時、学術調査に参加された元日本鱗翅学会会長高橋真弓氏の協力により、展示公開を企画しました。この蝶類調査で得られた標本・資料などが、40 年ぶりに展示公開することになりました。蝶類標本にはロドプテロン・モルフォチョウをはじめ、この山群の固有種（特産種）が多く含まれ、その学術的価値はきわめて高いものです。



ロドプテロン・モルフォチョウ

コレクション紹介 (9)  
小澤智生氏 貝化石標本  
延原 尊美



掛川層群大日層の貝化石密集層のブロック標本



キサゴ類化石の集団標本

2007年3月をもって名古屋大学大学院環境学研究科教授を定年退職された小澤智生氏より、掛川層群産貝化石コレクションを寄贈いただきました。

掛川層群とは、今から約500万年～100万年前に静岡県の遠州地域一帯に広がっていた海に堆積した地層群で、貝化石を豊富に産することで昔から有名です。掛川層群からは、モミジツキヒガイ *Amusiopecten praesignis*、パンダフミガイ *Megacardita panda*、スウチキサゴ *Umbonium suchiense* などの多くの絶滅種が、1920年代に次々と新種として記載されました。これらの絶滅種は、高知県や宮崎県などの同じ時代の地層からも発見されており、当時の古黒潮洗う西南日本の太平洋岸に繁栄していたことが知られています（そこで、当時のこれらの暖流系動物群を「掛川動物群」と呼んでいます）。小澤氏のコレクションは概算でも数千点におよび、掛川層群のほぼ全層準にわたっていることから、かつての暖流域に繁栄した絶滅種の栄枯盛衰や形態の進化を語りかけてきます。

掛川動物群は、次の二つの点で注目されています。ひとつは、現在は台湾以南にしかいないような熱帯・亜熱帯性の貝類が化石として産出すること、もうひとつは、日本周辺にのみ分布

する種群が時代とともに殻形態を変化させていることです。後者の代表としては「ながらみ」としても食卓に登場するキサゴ類があげられます。キサゴ類のような日本固有要素の進化は、日本の海洋動物相の成り立ちを考える上で重要な鍵となります。

小澤氏は、九州大学助手、東京大学助手、兵庫教育大学助教授を経て、名古屋大学助教授さらには教授と歴任する間、キサゴ類の進化をつまびらかにすべく、化石・現生を問わず各地の集団標本を収集しました。そして、殻形態の情報だけでなく、DNAの遺伝情報に基づく分子系統学的手法をも導入して、繰り返し起きた気候変動とキサゴ類の進化の関係を明らかにしています。掛川層群のキサゴ類化石の集団標本は、寄贈標本の中でもとくに注目すべきものです。時代を通して20数産地から、それぞれ200個体以上の保存良好なキサゴ類化石を収集され、その形態の進化を如実に追跡することができます。また、共に産出する他の貝化石を一セットで産地ごとに採取されている点もたいへん重要です。私たちは、それらの標本から「キサゴ類の進化が起きたのはどのような生息場所なのか?」、また「その背景にどのような気候変動があったのか?」も見るすることができます。

自然観察会報告  
フィールドワークたいけん 化石採集と地層見学  
延原 尊美



地層の露頭の前で地層の説明

2007年8月25日(土)に、袋井市～掛川市に広がる掛川層群を見学対象に、「化石採集と地層見学」の会を行いました。自然博ネットの会員以外からも一般参加者を募り、定員40名を超える多数の応募がありましたが、残念ながら当日はキャンセルが重なり、大人9名、小学生以下の子どもたち14名、引率3名の参加となりました。

参加者は、午前10時30分に袋井市役所に集合し、バスおよびサポート車1台にて出発しました。バスの中では、受付の際に手渡した「化石採集安全クイズ」回答者の中から抽選で3名の方に、「アンモナイト」、「三葉虫」、「(当日採集された)ギンエビス」の化石をそれぞれ進呈しました。夏休みの思い出として、楽しく充実した1日となっただけでなく、生涯この自然史体験が子どもたちに根づかんことを祈りたい。

反省点としては、参加の締め切りを先着順にしたことで、常に応募漏れとなる方がでていたことがあげられました。今後は、申し込み締め切りを設定したのち、その中から抽選を行う等の対応策を検討したいと考えます。最後に、袋井市教育委員会および掛川市教育委員会には広報に関しましてご協力をいただきました。とくに袋井市教育委員会の皆様には、バスの運行そのほか細かな点に至るまで多大なご協力をいただきました。また、化石採集に関しては後藤興業および中遠農林事務所に許可いただきました。ここに記して感謝いたします。



化石採集に夢中な子どもたち

層の見学地には14:00ごろ到着し、炎天下の熱中症も心配であったため15:00には袋井市役所へ引き返しました。帰路のバスの中、「化石採集安全クイズ」回答者の中から抽選で3名の方に、「アンモナイト」、「三葉虫」、「(当日採集された)ギンエビス」の化石をそれぞれ進呈しました。夏休みの思い出として、楽しく充実した1日となっただけでなく、生涯この自然史体験が子どもたちに根づかんことを祈りたい。

反省点としては、参加の締め切りを先着順にしたことで、常に応募漏れとなる方がでていたことがあげられました。今後は、申し込み締め切りを設定したのち、その中から抽選を行う等の対応策を検討したいと考えます。最後に、袋井市教育委員会および掛川市教育委員会には広報に関しましてご協力をいただきました。とくに袋井市教育委員会の皆様には、バスの運行そのほか細かな点に至るまで多大なご協力をいただきました。また、化石採集に関しては後藤興業および中遠農林事務所に許可いただきました。ここに記して感謝いたします。